

日本労働年鑑 第25集 1953年版
The Labour Year Book of Japan 1953

第一部 労働者状態

第五編 労働者の生活

第二章 栄養

一、国民栄養調査

一九五一年の厚生省「国民栄養調査」によって労働者の栄養状態をみよう。

(一) 調査対象 日本全国を大都市(札幌、仙台、東京、横浜、大阪、京都、名古屋、福岡、神戸、金沢、呉、松山)、中小都市(人口三〇、〇〇〇以上)およびその他の町村の三階層にわけ、調査地区をそれぞれ任意抽出する。このほか特殊調査として炭鉱山四カ所(北海道、秋田、福島、福岡)および東京鉄道局従業員について調査し、調査世帯は任意抽出によりきめられる。

(二) 調査時期 二月、五月、八月、十一月の年四回におこなう。

(三) 調査方法 調査月中、連続三日間の栄養摂取量を調査員が戸別訪問して調査し、その前後に併せて被調査者を一定の場所に集めて医師が身体栄養状態を調査する。

国民の栄養摂取量は、一般的には年々増加の傾向にあるが、一九五一年の全国平均(一人一日当り)のカロリー摂取量は標準量二、一五〇カロリーに対し、いまだに二、一二五カロリーである。

蛋白質もこれと同様、逐年増加の傾向にはあるが標準量七五グラムに対し一九五一年六八グラムでまだ約一〇%の不足が見られる。無機質についてみても同じく標準量より著しく低く燐だけは過多でカルシウムとの間に極端なひらきがみられる。

鉄は標準量に比して割合高い摂取量を示している。

ビタミンは最近一般に低落傾向にある。ビタミンAは標準量に比し約三〇%の不足、B1は統計面では標準量に達しているが、これは調理上の損失を考えると標準量を下廻る。同じくCも相当量の数字が出ているがこれはとくに破壊されやすいもので鮮度を必要とし、また加熱に対しては極めて不安定であるため調理上の損失が相当量考えられるので標準量に比して不足と思われる。

(イ) 熱量摂取量

都市の熱量摂取量は第一五七表によると全国平均二、一二五カロリーを下廻り、前年度よりはほんの少し増加が見られるが、いずれも標準量に達していない。これに反し農村は二、一七七カロリーで、前年の減少をもちかえし標準量を上廻っている。

(ロ) 蛋白質摂取量

都市、農村とも毎年増加傾向にあるがいぜんとして不足し、都市は動物性蛋白質が全国平均一九グラムに対し、東京二六グラム、一都市二六グラム、その他の都市二二グラムとなり相当に高いが、なお一二%の不足であり、農村は都市に比較すれば劣るが近年いちじるしく好転している。

特殊調査によって東京鉄道局員世帯における蛋白質摂取量をみると(第一五八表)、前年の六五・五グラムかち六〇・二グラムに下っている。秋田鉱山従業員世帯についても同じく減少の傾向が

みえ(第一五九表)、北海道、福島、福岡の三炭坑も同様に前年の七五・五グラムから七一・七グラムに落ちている(第一六〇表)。

(ハ) 脂肪摂取量

都市では動物性蛋白質と同様、第一五七表のように標準量には達しないが全国平均をはるかに上廻っている。しかし農村は全国平均を下廻り、都市と著しい差を示している。

東京鉄道局従業員世帯では前年と同じで変化が見られず、全国平均を出ているが、標準摂取量二五グラムに比べるとまだ不足している。秋田鉱山従業員世帯では前年の一九・五グラムにくらべ一四・六グラムに減少している。北海道三炭坑従業員世帯では前年と同様二〇・八グラムとなっており変化は見られないが、やはり標準必要量より相当低い

二、農民の栄養状態

農林省統計調査部は、農家の食糧消費と栄養摂取の状況を明らかにするため、農家経済調査の一部として行われる栄養摂取最調査の結果を、五一年四月分より公表している(農林省「農民栄養調査月報五一年四月分、一九五一年一二月刊、以下一二月分まで)。つぎにその調査結果にもとづき農民の栄養状態を記述する。なお本調査の対象は、農家経済調査と同じく、全国五五〇町村の五、五〇〇戸の農家である。

調査方法は、農家経済調査のうち、農家の購入した飲食物の数量価格に関する部分をさらに詳細に分析計算し、それを基礎にして食品別の栄養成分表を用いて栄養摂取量を計算するのである。調査品目は八四品目で、また当月に購入し、または自家生産物のうち家計に仕向けられた飲食物を世帯員の「摂取量」と仮定してある。したがって実際の摂取量とは必ずしも正確には一致しないことを注意せねばならぬ。なお栄養摂取量の計算に用いた「栄養成分表」は国民栄養及び食糧対策審議会が一九五〇年九月決定した「日本標準食品成分表」によっている。

まず第一六一表によって蛋白質摂取量をみるに、五一年四月六三・七グラムから田植期の六月には六九・〇グラムに増加し、一一、一二月にも六七・〇、七四・七グラムと増加している。九ヵ月間の平均は六五グラムであるが、これは前記審議会の決定した日本人標準蛋白必要量七五グラムになお一〇グラム不足している。蛋白質のうち動物性のものは平均七・七グラムで、蛋白質総量に対する比率は一一%前後であるが、これは五〇年度の都市居住者における比率三〇・四%(厚生省「国民栄養調査」)にくらべると著しく低い。

脂肪は一グラムから一六グラムの間を上下し、平均して一三・九グラムであるが、これも標準必要量二五グラムに遙かに不足している。

最後に摂取熱量であるが、五月の最低二、二五〇カロリーから一二月の最高二、七二七カロリーまで、月によりかなり変化があるが平均量は二、四二三カロリーである。これは厚生省調査の五〇年農村平均二、一六三カロリーにくらべるとかなり多いし、必要量二、一五〇カロリーを上廻っている。もっとも、本調査の対象たる農家は、平均して約一町歩の耕地を経営し、外に一町歩の林野を有する農家であるから、この調査結果は、農村の平均以上の農家の栄養状態を示すものであることはいうまでもない。しかし以上の調査結果から言えることは、農民の栄養摂取状況において当面する問題は、熱量の不足よりはむしろ摂取蛋白質の質の問題、脂肪分の不足の問題に重点があるようである。なお、一般的に平均以下にある農民の熱量不足と同時に、農繁期の重労働に従事する農民にとって、右の調査結果たる摂取熱量が果して十分かどうかの問題も重要である。

この点を新潟、愛知の農村二ヵ所についてより立入って調査した結果によれば(農林省統計調査

部「農民の労働と栄養に関する調査」五一・三)、農民は農閑期にはB級またはC級に相当する労働を、農繁期にはE級に相当する労働をなし、年間平均一日の消費熱量は新潟三、一二〇カロリー、愛知三、一五〇カロリーとなっている。ことにE級とは重労働またはそれ以上の過重労働をさすのであるが「農民の摂取熱量は農繁期の激しい労働の日には、消費熱量に達しないことがある。この場合、農民の消費熱量が余りに大きく、ために、それを補うに必要な食品の量は消化能力の限界を超えていたということ、または疲労が激しいため生理的機能の低下を来し、したがって食慾も低下したということの二つの原因が考えられる。」したがってまた六月(新潟、愛知)、一〇月(新潟)には農民の体重が減少し、とくに消費熱量が三、六〇〇カロリーないし四、〇〇〇カロリーを超えたときには、著しい体重減少が現われてくることが認められた。一日二キロの体重減少の認められたものがかなりあり一キロ減少はザラにあると報告されている。

また農民の米の過食については「農民は消費熱量が大きいために、それを補う熱量給源として米を多く食べるのだ」と結論し、年間平均一日当米麦消費量(玄米換算)成人男六・九合、六・八合(愛知)、女六・〇合(新潟)、五・八合(愛知)は「農民の労働が現在のものであり、また栄養形式が現在のものであるかぎり、理論的に妥当であり必要なものである」とのべられている。(ちなみにこの調査結果は政府の現行保有米量四合の規定を全く否定するものである)。なおこのほか、右の調査によって、最低血圧、血液比重の低下は全国および都市住民のそれより著しいこと、口角炎発生率も相対的に高いことが明らかとなり、結局「農民の健康状態は良好とはいえない。ことに農業期の単作地帯の農民は過労状態である」と結論が下されている。

三、林業労働者の栄養状態

南九州の国有林斫伐現場について行った労働医学心理学研究所の実態調査(一九五〇年九月)によって、林業労働者の栄養状態をみよう(加久藤営林署管内大平事業所の調査。林野庁「林業実態調査報告」一九五一年九月刊)。

この国有林労働者の栄養摂取状態は、熱量では消費熱量を補っており、大体四、〇〇〇—四、五〇〇カロリーをとっている。しかし配給の主食と労務加配主食を合せてもこの量には不足で、九〇〇—一、〇〇〇カロリーの主食を別箇のルートで各人が補っているのである。動物性食品はとくに少量で、一日平均三〇グラムである。野菜の供給は著しく少いので、労働者は自家菜園で自給しているが全体として不足し、特に冬期の野菜不足はビタミン摂取を乱調なものにしている。ただ油脂だけは比較的多く用いられている。一般にこの林業労働者の「栄養状態は不良で貧血のものが約五三%みられ、低栄養に基因して最低血圧値は一般に低く、脈拍は著明に増加して憂うべき状態にある」(九一ページ)。職種別には造材夫の栄養状態がもっとも悪い。

林業労働者の子供には口角糜爛四一%もあり、栄養の質的な欠陥が発育途上にある児童の局所症状として現われている。とくに生活程度の低く、子沢山の家庭に発生率が高い。

四、学童の栄養状態

文部省の学校給食における栄養出納報告に基いて、学童の栄養状態をみよう。

一、調査の時期 一九五一年六月、七月、九月、一〇月、十一月の五ヵ月間

二、集計方法 各府縣から報告されたモデル・スクールの栄養月報を都市、町村別に各学校の給食回数給食人員に基いて摂取食品類別に分類し、一人一食の使用量を食品類別荷重平均成分表によって計算し全国集計を行った。都市については、六月四四校、七月三五校、九月四二校、一〇月三六校、十一月四三校、町村においては、副食の給食校として七月三校、九月四校、一〇月四校、十一月四校を集計した。

都市学童においては栄養摂取量の最高は、熱量七二〇カロリー、蛋白質二五・ニグラムで、うち動物性蛋白一〇・一グラム、植物性蛋白一五・一グラムで、その比率は四〇対六〇である。又脂肪は七・四グラムである。これを食量及び栄養対策審議会勧告の児童栄養基準量と比較すると、熱量、蛋白質、脂肪、鉄については極めて理想的な数字を示しているが、カルシウム、ビタミンA、B1、B2は、いずれも基準量に対して相当の不足を示している。

町村学童については、最高熱量三〇八カロリー、蛋白質一七・ニグラム、最低熱量は六四カロリー一、蛋白質四・五グラムである。これを基準量と比較すると熱量においては一五カロリーの不足であるが、その他の動物性蛋白、脂肪、カルシウム、鉄、ビタミンA、B1、B2等に相当量の不足がある。

食品群別に見ると、一九五〇年国民栄養調査による日本人平均では圧倒的に穀類が多く七五・八%を示し、カロリー源としての含水炭素の食料が主で、脂肪、ビタミン類の摂取量は少い。これに対して給食学童では穀類が六二%である。しかし脂肪、無機質、ビタミン類が含まれている他の魚介、肉、卵、牛乳及乳製品、野菜、果実の摂取量には相当の不足が見られる。

日本労働年鑑 第25集 1953年版

発行 1952年11月15日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年8月10日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1953年版(第25集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
